どうとくの本

第4号
2020年春号

［特集］
道徳と情報モラル

東京書籍

この機関誌は，一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っています。

CONTENTS

［どうとくのわ］2020年春号

巻頭言 3
道徳科実施を振り返って
―次の一歩を踏み出すために、いま見つめてみたいこと―
兵庫教育大学大学院教授　谷田増幸

道徳と情報モラル 4
情報モラルをどう指導するか
静岡大学准教授　塩田真吾

中学校
実践 8
道徳の授業における情報モラル教育の取り組み
東京都江東区立深川第七中学校副校長　和田総治

指導案 10
登場人物への自我関与を通して多面的・多角的に考える授業
元兵庫県神戸市立有野北中学校校長　磯辺次雄

小学校
実践1 12
自覚を促す情報モラル教材の開発
～リアル&ネットコミュニケーションスキルの育成を目指して～
静岡県静岡市立長田西小学校教諭　棚橋俊介

実践2 14
「難しいけど、楽しい」「成長してるね」と言える授業を子供たちと一緒に創ろう
愛知県あま市立七宝小学校教諭　鈴木賢一

編　　集：東京書籍 編集局 道徳編集部
編集協力：株式会社エディット
デザイン：クオルデザイン（坂本真一郎）
イラスト：サカモトアキコ

道徳科実施を振り返って

―次の一歩を踏み出すために、いま見つめてみたいこと―

検定教科書を用いて道徳科が始まり、小学校では二年、中学校では一年が経過しました。何とか一巡りしたというあたりですね。みなさんはどのような実感をおもちですか。

研修会などで学校にうかがうと、「指導方法、分かってきました！」「道徳科の評価ってこんなもんだな。」という声も聞こえてきますが、「まだ分かんないなあ…。」という声に個人的には親近感を覚えます。道徳科（道徳教育）が目指すものは道徳性の育成です。そのことが〝一朝一夕〟に成し遂げられると考えるのはいささか不遜であるような気もします。

ちなみに、道徳性は「徐々に、しかも、着実に養われることによって、潜在的、持続的な作用を行為や人格に及ぼすもの」と『中学校学習指導要領解説』には示されています。私たちは何か急ぎすぎていませんか。私たちはひょっとしたら目に見える結果を早く求めていませんか。私たちは子供の心をどこかに置き去りにしていませんか。子供一人一人の人格の完成に関わっているという事態をもう一度捉え直してもよいと思います。そこに教師としての立脚点や誇りもあるのではないでしょうか。

そのように考えれば、これからの道徳教育の方向性もいくらか見えてきそうです。

教育活動全体を通じて子供の心の育ちを見つめる

一つは今一度教育活動全体を通じて子供たちの心の育ちを見つめる視点です。そこでは子供を中心点として時間軸や空間軸、さらに関係軸の概念が広がっていきます。具体的には、道徳科の内容との関連を踏まえた各教科等における指導、豊かな体験活動の充実、家庭や地域社会との連携などが浮かびます。「言うは易く行うは難し」という印象をもたれるかもしれませんが、全体計画や別葉の作成だけに終始するのではなく、子供を中心に据えて一つ一つの教育活動、指導や支援の場面における道徳的な意味を見つめ直していただきたいと思います。それらの教育活動などが道徳科を要として共鳴し合いそこから紡ぎ出される〝物語〟に、私たちはきっと豊かに生きる意味を見出すはずです。

授業において生き方を考えることの意味を問い直す

その上で、道徳科の授業にはどんな意味が込められているのかと問い直す視点です。おそらくうわべだけのむなしい授業には閉口されているはずです。やはり子供たちの〝心の琴線〟に触れる授業をしたいと。では、どのように教材を分析すればよいのか、どのように発問をすればよいのか、どのように子供たちと対話を深めればよいのかなど、授業改善の具体が浮かんできそうです。でも、手段や手立てを通り越して、「共に考え、共に語り合う」この時間この場所で、〝貴重な物語〟が立ち現れてくる瞬間があります。それは、子供たちが生き方を考え、捉え直す瞬間に、私たちが立ち会うことでもあります。

こう仮定してみると、教材などを手掛かりに様々な〝物語〟が創出される時空間が道徳科（道徳教育）とも捉えられそうです。それは決して数値化されないけれど、とても魅力的でドキドキするものかもしれません。サン＝テグジュペリの名言にもあるように、それは心で見なくてはなかなか見えないともいえそうです。時には「待つこと」や「曖昧さに耐えること」も求められそうです。その練習は、まず私たちが先入観なしに教材や体験などに真摯に向き合うこと、また、そこから何かを感じ取ることから始まるのではないでしょうか。

プロフィール
兵庫教育大学大学院教授
谷田（たにだ） 増幸（ますゆき）

広島大学卒業，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）修了。広島市立中・高等学校教諭，広島市教育センター指導主事，文部科学省教科調査官などを経て現職。主な著書『「特別の教科　道徳」が担うグローバル化時代の道徳教育』（共著）（北大路書房），『新中学校道徳指導細案』（編著）（明治図書）など。

道徳と情報モラル

情報モラルをどう指導するか

静岡大学准教授
塩田 真吾（しおた しんご）

❶ 子供たちのSNS利用の現状

現在、ネットやSNSに起因するトラブルにどう対応するか、そしてどのように指導するかは、多くの学校において頭を悩ませる課題です。ここでは、特に指導方法の課題と具体的な指導のポイントについて紹介したいと思います。

それでは、ネットやSNSをめぐってどのようなトラブルがあるのでしょうか。私の研究室では、LINE株式会社と共同で、約6000人の小中高生を対象とした質問紙調査を行い、トラブルの発生頻度と深刻度を分析しました。その結果、明らかになったトラブルのワースト5を見てみましょう。

まず、一番発生頻度が高く、深刻度も高いというワースト1位になったのが、「スマートフォンの使いすぎ」です。小中高生の58・1％が「スマホやネットを使っていて家族から『使いすぎ』と注意された」と回答し、27・7％が「勉強や生活に大きな影響が出ても自分ではやめられない」と回答しています。「使いすぎ」をどう指導するかは、多くの子供たちにとって喫緊の課題と言えます。

ワースト2位は「ながらスマホ」です。小中高生の44・4％が「歩きながらスマホを操作した経験がある」と回答し、16・8％が「自転車に乗りながらスマホを操作した経験がある」と回答しています。また、全体の約30％が「ながらスマホなどでスマホを壊した経験がある」と回答しています。

ワースト3位は「SNSでの悪口」です。小中高生の14・9％が「SNSでのメッセージのやりとりで『バカ』『キモい』などの相手を傷つける言葉を使った」と回答し、7％が「SNSでのメッセージのやりとりで『死ね』『殺す』などの相手を強く傷つける言葉を使った」と回答しています。

ワースト4位は「個人情報の発信」、ワースト5位が「著作権の侵害」です。小中高生の6・3％が「自分や友達の住んでいる場所が特定される可能性がある写真や動画をSNSで公開した」と回答しており、6％が「著作権を侵害しているかもしれない動画や音楽が公開されているサイトからダウンロードした」と回答しています。

こうしたことを踏まえると、「使いすぎ」や「ながらスマホ」、「コミュニケーション」、「個人情報」、「著作権」などが指導を行う際のキーワードとして挙げられます。もちろん、こうしたトラブルは学校によって異なりますので、各学校の実態調査を行った上で指導することが必要になりますが、トラブルの傾向を知る上では参考になるデータであると言えます。

❷ 情報モラル教育の課題

では、このようなトラブルに対して、どのように情報モラルを指導すればよいのでしょうか。

現状、多くの学校での情報モラルの指導は、「外部講師を招いた一斉指導」が中心となっており、情報通信会社や有識者が、「こんなトラブル事例があります。」、「こんな危険性があります。」というトラブル事例の紹介と危険性の啓発に終始しているのではないでしょうか。それを受けて、教師は、「SNSで悪口を書かないようにしなさい。」、「リアルな人間関係を大切にして、嫌がることをしないようにしなさい。」、「個人情報を書かないようにしなさい。」といった指導を行い、家庭や学校でルールを決めさせるという指導が一般的になっています。

しかし、本当にこうした指導だけで十分なのでしょうか。例えば、「悪口を書かないようにしよう。」という指導で考えてみましょう。この指導の効果があるのは、「自分は悪口を言っている」と自覚している子供です。しかし、自分は悪口を言っているつもりはないのに、結果的にそれが相手にとっては悪口になっている場合はどうでしょうか。自分は悪口を言っているつもりはないので、いくら「悪口を書かないようにしよう。」と言われたところで、「自分は関係ない。」となってしまいます。自分は「いじり」「からかい」のつもりが、相手は「いじめ」と捉えているケースは多くありますので、「悪口を書かないようにしよう。」というだけでは、指導がいかに不十分であるかが分かります。同様に、「こんなトラブル事例がある。」、「リアルな人間関係を大切にして、嫌がることをしない。」、「スマホを使いすぎない。」と言ったところで、子供は、「自分は事例のようなトラブルになんてあわないし。」、「自分は人間関係を大切にして嫌なことなんてしてないし。」、「自分は使いすぎてないし。」と思ってしまう可能性があります。つまり、どんなに指導したところで、子供たちがトラブルを自分のこととして自覚していなければ意味がないということになります。

また、ルールをつくるという指導について考えてみましょう。学校や家庭でのルールは、ともすると次のような内容になりがちです。

- 夜遅くには連絡をしない。
- ネットで友達の悪口を書かない。
- 不適切な写真をアップしない。
- スマホを使いすぎない。

はたしてこれで子供たちはルールを守ることができるのでしょうか。

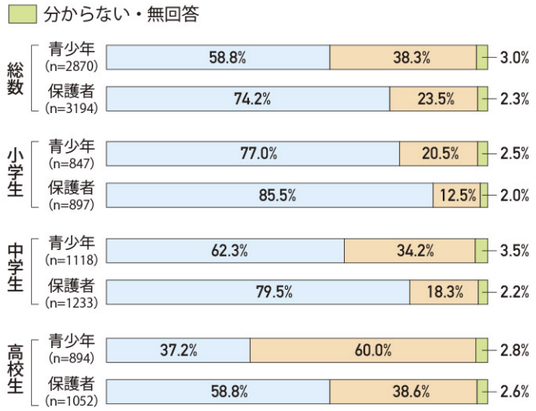
私たちの研究室では、こうしたルールを「スローガン的ルール」と呼んでいます。例えば、「地球を大切にしよう」というスローガンを批判する人はいませんが、このスローガンに賛成している人でも、ゴミの分別や節電ができないというのは、よくあることです。スローガンはあくまで理念であり、ルールではありません。

例えば、上記のルールでは、「夜遅く」、「悪口」、「不適切」、「使いすぎ」が曖昧な言葉であり、大人と子供、または子供どうしでも認識に「ズレ」が起きやすくなります。自分は夜遅くないつもりでも相手は夜遅いと思ってしまう、自分は悪口とは思っていなくても相手は悪口と思ってしまう、とならないように、ルールをつくる段階でこのスローガン的ルールの「曖昧さ」についてきちんと話し合う必要があります。

このルールの「曖昧さ」に関しては、興味深いデータがあります。内閣府が実施している「平成三十年度青少年のインターネット利用環境実態調査」（二〇一九年）では、青少年とその保護者のルールの有無に関する認識の比較が示されています。

これを見ると、「私の家にはルールがある」と思っている保護者は74・2％いるのに対して、「私の家にはルールがある」と思っている子供は58・8％です。中学生でみると、保護者は79・5％、子供は62・3％です。保護者がルールだと思って

●青少年とその保護者のルールの有無に関する認識の比較（学校種別）



いる内容が、子供はルールであると思っていない可能性が示されています。こうしたスローガン的ルールでは、結局つくっただけで終わってしまい、ほとんど意味がないということになります。

3 「自覚」を促す情報モラルの指導

こうした問題意識を基にして、私の研究室では、二〇一四年度よりＬＩＮＥ株式会社と共同で「楽しいコミュニケーションを考えよう」というワークショップ形式の情報モラル教材を開発しました。本教材では、子供たちにトラブルを「自覚させる」ことを主眼としています。

例えば、「自分とみんなの嫌な言葉」というワークでは、「①まじめだね」、「②おとなしいね」、「③おもしろいね」、「④個性的だね」、「⑤マイペースだね」の中から、自分が一番嫌だと感じる言葉を一つだけ選び、グループで共有します。実際の授業では、『まじめだね』を選ぶ人がいるとは思わなかった。自分は別に嫌な言葉ではないのに、人によっては嫌な言葉だと感じて驚いた。」など、自分は嫌な言葉だと思ってはいなかった言葉が、相手にとっては嫌な言葉になる可能性があることに気づくことができます。

また、「自分とみんなの嫌なこと」というワークでは、「①すぐに返信がない」、「②なかなか会話が終わらない」、「③知らないところで自分の話題が出ている」、「④話をしている時にケータイ・スマホをさわっている」、「⑤自分が一緒に写っている写真を公開される」という五つを、嫌な順に並び替えて、グループで共有します。こちらも実際の授業では、「私は『自分が一緒に写っている写真を公開される』ことは全然平気だったけれど、一番嫌だって思う人もいるんだ！」という声を聞くことができます。

私たちは、こうした指導方法を「カード分類比較法」と呼び、自分と他者との感じ方のズレをカード教材を通して考えさせ、議論させることにより、子供たちにトラブルを自分のこととして自覚させることができると考えています。例えば、「不適切な写真とは何か」、「使いすぎとはどのような状態か」を、カード教材を用いて他者と比較、議論することにより、自分も不適切な写真を公開していないか、自分も使いすぎていないかという自覚を促すことが期待できます。

●カード教材の例

4 「リスクを見積もる力」を育てる

さらに、「当事者としての自覚」の次のステップとして、自らリスクを想像し、それらを回避する力を育てる「リスクの見積もり」をテーマとした教材をＬＩＮＥ株式会社と共同で開発しています。

子供たちに調査を行うと、子供たちは、決して「何が危険なのか」を分かっていないわけではないことが明らかになりました。つまり、「これは危険だと思うけど、まあ大丈夫だろう。」というように、危険に関する知識の把握ではなく、危険（リスク）の見積もりに甘さがあるのです。もう少し言えば、「この写真をアップしたらちょっとまずいだろうけど、まあ炎上はしないだろう。」や「こう言ったら相手は少し傷つくかもしれないけど、まあケンカにはならないだろう。」という「何が危険か」は分かっているが、「どのくらい危険か」が分かっていない状態と言えます。

こうした子供たちに対して、「これが危険ですよ。」と知識だけを伝えてもあまり効果はないですし、「こんな危険なことをすると、こんなトラブルになります。」という「トラブルの結末」が提示される教材では、「どのくらい危険なのか」というリスクを見積もる力は育ちません。リスクを指摘するだけでなく、そのリスクが「どのくらい危険なのか」（リスクのグラデーション）を意識させる必要があるのです。

そこで本教材では、安全工学の分野で研究されるＫＹＴ（危険予知／危機予測トレーニング）の手法を取り入れました。子供たちが今後の危険を予想し、それがどの程度危険なのかを見積もるワークを取り入れることで、自らリスクを予想し、それらを回避する力を育てる内容になっています。

子供たちは、グループトークが書かれた五枚のカードを読み、それがどのくらいのリスクになるのかを、四段階（晴れ、くもり、雨、雷）のリスクの見積もりシートで考えます。晴れは「楽しい。うれしい。おもしろい。ホッとする…だろう」、雷は「ケンカする。怒り出す。泣く。炎上する…だろう」というようになっており、グループトークの内容が、今後、どのくらいのリスクになるかを想像し、リスクを見積もります。

それらをグループで共有することで、同じグループトークでも、人によっては、「晴れ」と予想したり、「雷」と予想したりと見積もりが違うことを体感し、「グループトークのどこに着目してリスクを考えればよいか」を考えさせます。

●LINE 株式会社と共同開発した教材例

この「どこに着目してリスクを見積もるか」は重要な視点で、子供たちの発言を分析すると、「グループの人数」や「発信時間の間隔」、「スクリーンショットでの転送の可能性」などをリスクの要因として考えていることが分かってきました。例えば、「仲良し四人のグループトークであれば、些細な文字の勘違いは、リカバリーされやすく大きなトラブルになりにくいけど、クラスのグループトークでは、人数が多いため勘違いが起き、大きなトラブルになりやすい。」などの意見が出てきます。

このように「何が危険なのか」だけでなく、「どのくらい危険なのか」（リスクのグラデーション）を考えさせることで、子供たちのリスクの見積もりの力を育てることが期待できます。

5 「0か1か」の指導を超えて

従来の情報モラル指導では、「写真を公開しない」、「知らない人と出会わない」という「0か1か」の指導が一般的でした。しかし、この「〜しない」という「0か1か」の指導では、子供たち自身がどのくらいの危険があるのかを考える機会を奪ってしまっていたとも言えます。

そもそも子供たちは「知らない人」と出会っているわけではなく、ＳＮＳを通じて「よく自分を知ってくれている人」と出会っていることや、写真を公開することで様々な人とのコミュニケーションが成立していることを考えると、この「〜しない」という「0か1か」の指導では、子供たちにはあまり響かないと言えるでしょう。

今後は、例えば「どのような写真を公開すると、どの程度のリスクがあるのか」、「ＳＮＳのプロフィールや書き込みから、どのようにリスクを判断すればよいか」など、「どのようにリスクを判断するか」というリスクのグラデーションを考えさせる指導が重要になってくるでしょう。

情報モラルの指導では、「こうすればすぐに解決できる」といった方法はありません。「トラブル事例の紹介」「危険性の啓発」という安易な指導法ではなく、どうしたら子供たちに問題を自分のこととして自覚させられるのか、どうしたらリスクを見積もる力を育てられるのかという視点で、「考え、議論する情報モラル」の指導法を考えてほしいと思います。

中学校
— 実践 —

道徳の授業における情報モラル教育の取り組み

東京都江東区立
深川第七中学校
副校長
和田（わだ） 総治（そうじ）

1 本校が情報モラルに取り組む理由

本校では、ここ数年、情報モラル教育に積極的に取り組んでいます。きっかけは、SNS上のトラブルが新入生の間であったからです。具体的には、小学校で結成されたLINEグループが中学校入学をきっかけに合体して多人数化したこと、そのグループ内で誹謗中傷や個人情報の不適切な取り扱いがあったこと、また、深夜二時までLINEのやりとりがあり、休日には約2000件の投稿があったことなどです。しかし、この情報化社会においてSNSを禁止することは、現実的ではありません。むしろ、情報モラル教育に積極的に取り組むことで、生徒が自分で判断して行動できる力と態度を身につけさせていきたいと考えました。情報モラル教育として本校が取り組んでいることは、情報安全教育として講演会を開いたり、生徒会活動の一環としてSNS学校ルールの改定のために学級討議や中央委員会を開いたりすることが挙げられます。今回は、「SNS東京ノート」を活用した道徳の授業での取り組みを紹介したいと思います。

2 「SNS東京ノート」について

「SNS東京ノート」は東京都教育委員会とLINE株式会社が共同開発した教材で、東京都では二〇一七年三月末から東京都内公立学校の全児童・生徒向けに配付されています。インターネットからダウンロードすることもできるので、小中高のどの学校でも使用することができます。本校では、その中の「カードで学ぼう」を使った道徳の授業をより深く研究しています。

では、そのカード教材とはどのようなものなのでしょうか？　よくネット上のトラブルを起こさないようにするための指導として「人の嫌がることを書かないようにしよう。」とか「相手の嫌がることはしないようにしよう。」と注意してしまいがちです。多くの人はそのことは分かっているのに、それでもトラブルが起きることがあります。それは、嫌だなと感じる言葉や行為に認識のズレがあったり、言葉だけだと誤解されて伝わったりすることがあるからです。そのことに意外と気づいていないので、その違いに気づき、トラブルが起こらないようにするためにどのようにしていったらよいかを議論しようというのがこのカード教材です。自分と相手との違いを知ることは、情報モラルだけでなく、日常生活におけるモラルにもつながるものだと思います。

3 実際の授業

二〇一八年度の道徳授業地区公開講座で一年生と三年生が行った授業の一部をご紹介します。教材の例（図1）に沿ってカードを使用し、授業を展開します。最初に個人ごとに並べるのですが、各自見事にばらばらになります（図2）。そのことに生徒たちもビックリするので、意見も活発に出ます。「おまえ、これ嫌なの？　なんで？」「私、これ絶対にイヤ。だって…」のように、その理由についても自分から話し出します。これらの意見をまとめていく必要はありません。認識の仕方や物事の感じ方は人それぞれで、自分と同じとは限らないのだということや、そのことがトラブルの原因になることがあるのだということに気づき、そのトラブルを避けるためにはどのようなことに気をつけていかなくてはならないかを自分たちで考えていくことができれば、その授業は、大変道徳的な意味があると思います。気づき、考え、議論することが主体的にできるからです。各班で出た意見を班の代表者が全体で発表し、それぞれの班で出た意見の共有もしています。

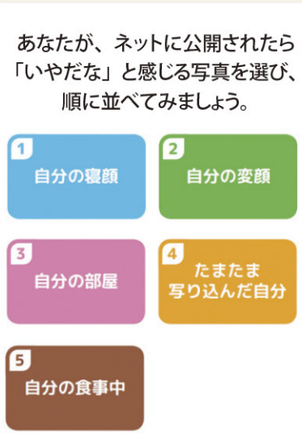


図1　教材の例

図2　カードの順番が異なっている様子

4 スマホミーティング

この授業のようなスマートフォンに関わる話し合いのことを「スマホミーティング」と呼んでいます。このスマホミーティングをより深めるためにちょっと変わった工夫をしています。年に何回かですが、異校種・異学年・保護者を交えたスマホミーティングを行います。意見交換をする際に、自分たちの集団とは違う立場の人に違う角度から意見を言ってもらうことで、新たな発見があるのではないかということを期待しています。

二〇一八年に、当時、東京都の情報モラル推進校に指定されている都立高校の情報委員会の生徒に来てもらってスマホミーティングを始めました。事前に打ち合わせをしておき、各学年でスマホに関わるどのようなことをテーマにして話し合えばよいかを決めます。授業は高校生の代表者がパワーポイントを使って進め、話し合いの時には各班に一人ずつ高校生が入ってスマホミーティングを行いました。

二〇一八年度は、本校の道徳授業地区公開講座で学年ごとに異なる形式のスマホミーティングを行いました。二年生では保護者を交えた形式でしたが、生徒も保護者も意見を言いづらいと思い、保護者が生徒の班に入るのではなく、保護者だけの班を作って同じ課題で話し合いをし、各班で出た意見を班の代表者が全体で発表する時に、子供の考えと親の考えの違いを知るという形を取りました。

二〇一九年度は、近隣の高校と連携をして行いました。その中のある高校生の感想に「高校生よりもネットに触れる時間が少ないためか、中学生の中にはSNSで写真をアップロードすることなど楽観的に捉えている人もいると感じた。」というものがありました。この高校生は、高校生という立場から意見を言ってくれていました。

また、小学校の道徳の授業に本校の中学二年生を代表生徒として参加させる試みも行っています。異校種としてのスマホミーティングという効果だけでなく、小中の連携教育としても大きな意味をもっています。

5 情報モラルと道徳の今後について

『中学校学習指導要領解説』に「社会の情報化が進展する中で、生徒は、学年が上がるにつれて、次第に情報機器を日常的に用いる環境の中に入っており、学校や生徒の実態に応じた対応が学校教育の中で求められる。」とあります。しかし、教員や保護者など大人の知識より、子供たちの知識の方が早く進んでしまう心配があります。その環境の中でも子供たちを守り、正しく育てていくためには外部の機関とも適切な連携をとり、学校における情報モラル教育を常に充実させていく必要があります。例えば、子供がスマホ依存症にならないようにするために、一日の時間の使い方を考えるタイムマネジメントの道徳の授業なども研究されているようです。情報化社会と同様に、道徳授業もどんどん進展させていきたいと思います。

中学校
―指導案―

登場人物への自我関与を通して多面的・多角的に考える授業

●**主題名**：よりよい社会のために
●**教材名**：「宝塚方面行き―西宮北口駅」（東京書籍「新しい道徳　2」）
●**内容項目**：C(10)　遵法精神、公徳心
●**ねらい**：電車内の座席について、おじいさんから注意されたミサの心の中について話し合い、自他の権利を大切にして、公徳心をもって行動しようとする実践意欲を養う。

主題設定の理由

❶ねらいや指導内容について

ミサは友人のために電車の座席に鞄を置いていた。この行為が「混雑する車内」では他の人の権利を大切にしないことであることに気づかせる。その上で、自他の権利を守るために法があり、遵法精神を支えている公徳心を日常生活の中で具体的に生かすことで、住みよい社会を実現していこうとする心を育みたい。

❷生徒の実態について

中学生の時期の友人関係は閉鎖性を伴いがちになる。この閉鎖性を克服し、他の人の権利を大切にすることが社会に目を向けることになると気づかせたい。

❸教材について

ミサは注意されて初めて、自分の行為が公徳心に反することに気づくが、言い訳をしてしまう。

遵法精神を支える公徳心には「自分を裏切らない」という自尊心と、外見からはうかがい知れない他の人の心情を想像できる思いやりの心が関わっていることまで考えを深めることで、生徒は電車内のみならず、日常生活の中で類似の体験や場面に遭遇していることを考えやすくなり、自分のこととして取り組むことができるだろう。

「主体的・対話的で深い学び」のために

知識として公徳心は理解しているが、実践となると難しいということが現実の生活の中では多くある。生徒の体験の中でそのような場面について、心情円を活用するなどして本音が語り合えるようにしたい。

評価

「公徳心は自他の権利を大切にする」という知識の理解ではなく、「自分を裏切らない」「他の人の心を思いやる」ことに関係しているところまで深めることによって、うかがえる実践意欲を見取る。

評価の方法

知識として理解するだけでなく、実践意欲につながっているかをワークシート等の記述から見取る。

生徒を認め励ます評価（学習状況の把握）の例

「知識として理解するだけでなく、葛藤しながらも行動に結び付けたいという意欲が見られます。」

板書例

よりよい社会のために
宝塚方面行き　西宮北口駅

大きな声で怒鳴られた→恥ずかしい
何を恥ずかしいと思ったか
　周りに見られた
　非難の眼差しが自分に集中している
　注目を集めた理由
どんな理由だろう
　みんな座りたいのに
　鞄で席をとる行為＝公徳心に反する
　公徳心＝自他の権利を大切にする
ミサはどんなことを分かっていたか
　おじいさんは座りたいから怒鳴ったのではない
　こんなことで言い訳をする方が恥ずかしい
　自分たちの名案は他人が
　苦々しく思うようなことである
公徳心＝自他の権利を大切にする
　自分を裏切らない
　他の人の心を思いやる
日常生活で考えよう

元兵庫県神戸市立
有野北中学校
校長
磯辺（いそべ） 次雄（つぎお）

展開例

学習の流れ	予想される生徒の反応	指導上の留意点
1 駅や電車内のマナーについて話し合う。		
● 駅や電車の中で迷惑だなと感じたことはどんなことだろう。	●列にきちんと並ばない。 ●ドアのところに立っている。	●みんなが迷惑だと感じる行為を理解させる。
2 教師が範読する。		
● 大きな声で怒鳴られたとき，ミサは何を恥ずかしいと思ったのだろう。	●周りに見られて恥ずかしい。 ●非難の眼差しは全て自分に突き刺さっていたことが恥ずかしい。 ●注目を集めたことより，その理由が恥ずかしい。	●生徒自身がミサになったつもりで，この状況では何が恥ずかしいか考えさせる。
● その理由とはどんなことだろう。	●みんな座りたいのに，鞄で席をとる行為。 ＝公徳心に反する行為である。	●表面的な行動だけでなく，その行為の本質は道徳的な価値（公徳心）に反する行為であることを理解させる。 ●自他の権利を大切にすることで，規律ある安定した社会が実現することの理解を確認する。
● 「そうじゃないのは二人ともたぶん分かっていた。」とあるが，ミサはどんなことを分かっていただろう。本文を読んで，気づいたことを発表しよう。	●おじいさんは座りたかったから怒鳴ったのではないこと。 ●こんなことで言い訳する方が恥ずかしいということ。 ●自分たちが「名案」と思っていた行動は，他人からは苦々しく思われていたこと。	●ここまでは多くの中学生は理解している。ここから深めることが大切である。 ●遵法精神やそれを支える公徳心には「自分を裏切らない」という自尊心と，外見からはうかがい知れない他の人の心情を想像できる思いやりの心が関わっていることまで考えを深めたい。 ●「『おじいさんは座りたかったから怒鳴った』という発言は，他人の心が想像できないのか，自分を裏切っているのか，どちらだろう。」という補助発問をし，言い訳であることに気づかせる。
3 本時のまとめ		
● 自分たちの身の回りの日常生活で公徳心に反するような行為をあげて，自分の意見を書いてみよう。		●公徳心には「自分を裏切らない」という自尊心と，外見からはうかがい知れない他の人の心情を想像できる思いやりの心が関わっていることなど，道徳的価値の理解を深めた上で日常生活の事例について考えさせたい。 ●価値の理解にとどまらず，実践の難しさに気づかせ，実践意欲を高める工夫をしたい。

小学校
―実践１―

自覚を促す情報モラル教材の開発

～リアル＆ネットコミュニケーションスキルの育成を目指して～

静岡県静岡市立長田西小学校
教諭
棚橋（たなはし） 俊介（しゅんすけ）

1 はじめに

スマートフォンやタブレットの急速な普及により、私たちの生活の中でインターネットは当たり前の存在になりました。子供たちの会話に耳を傾けると、「ユーチューバー見た?」「ＬＩＮＥで連絡するね。」などといったネットに関係する内容が多く聞かれます。また、ＴｉｋＴｏｋに動画をアップしてコミュニケーションをとるなど、ネットの存在を意識せずにネットの世界に浸っている姿も見られるようになりました。

このような状況の中で、昨今行われてきた情報モラル教育は、

- **極端なトラブル事例をたくさん見せて、怖がらせる**
- **映像教材を見せて、トラブル回避方法について考えさせる**

といった内容が一般的でした。

筆者も同様の指導を行ってきており、授業後の感想では「こうならないようにルールを守りたい」「インターネットの怖さが分かった」など前向きな言葉が多く見られました。しかし、実生活に戻ってみると、学習したはずの内容が全く生かされておらず、「自分は言われても嫌ではないから」と相手の気持ちを考えずに思ったことをそのまま発したり、「みんなも同じことを言っているから」と特定の児童に対する誹謗中傷を行ったりして様々なトラブルが発生しました。また、このような言動は現実世界だけでなく、ＳＮＳ上でさらに過激な内容となり、子供たちの人間関係は、学校での指導だけでは修復困難になることもありました。

このような問題を解決するには、ネット上のコミュニケーションスキル（ネットスキル）だけでなく、日常のコミュニケーションスキル（リアルスキル）の両方の向上が不可欠だと考えました。また、子供たちが他人事ではなく、自分ごととして問題を受け止め、解決しようとする新たな指導方法を確立したいと考え研究を行いました。

2 教材開発

（1）単元計画の作成

静岡大学教育学部塩田真吾研究室の監修のもと、児童の実態に合わせた単元計画（全10時間）を作成しました（表1）。児童がもつ課題を５つのフェーズに分け、回を重ねるごとに難易度が上がるように構成しました。難易度の高い問題については、それまでに獲得したスキルを活用することで解決することができるようにしました。

回数	フェーズ	テーマ
1	感じ方の違い	「嫌な言葉」「嫌なこと」を考えてみよう
2	話し方聞き方	相手の話の聞き方を考えよう
3		相手に伝わる話し方①
4		相手に伝わる話し方②
5	怒り	「怒り」の気持ちと向き合おう①
6		「怒り」の気持ちと向き合おう②
7	断り方謝り方	上手な断り方
8		上手な謝り方
9	ネットトラブル	SNSの「上手な使い方」を考えよう①
10		SNSの「上手な使い方」を考えよう②

表１　単元計画

（2）一時間の流れを作る

児童が本時の中でどのような活動をし、何について考えるのかを明確に理解して学習できるように、一時間の流れを以下のようにテンプレート化しました。

【リアルスキル】

①クラスのトラブルを紹介
②スキルの伝授（モデリング）
③スキルの実践（リハーサル）
④スキルの振り返り（フィードバック）

【ネットスキル】

⑤ネットトラブルを紹介（リアルスキルの活用）

前半にリアルスキルについて学んだ後、後半でネット上の問題について考えるようにしたことで、一時間の中で児童にリアルスキルとネットスキルを同時に身につけられるようにしました。

（3）カード教材の開発

児童がトラブルの本質に迫り、獲得したいスキルについて考えられるように、カード教材を静岡大学教育学部塩田研究室と共同開発しました。カードにはそれぞれ、クラスの実態に合わせたトラブル事案が載せられています（図1、2）。

カードは一人一セット配布し、図2のように目的に合わせて並び替えます。自分と友達の並べ方を見合い、並べた理由について議論します（カード分類法）。こうした議論を行うことで、「もしかしたら自分も嫌なことを言っているかも…。」と自覚を促すことができます。

図１　開発したカード教材

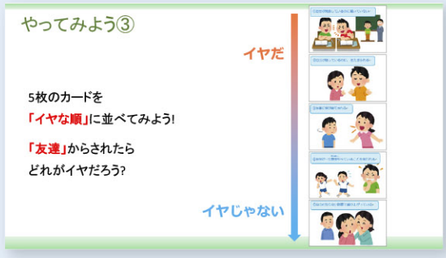


図２　カードの活用スライド

3 授業実践

クラスのトラブル事案が書かれたカードを、「嫌だと思う」順番に並び替えさせると、自分と友達のカードの順番が異なることから、人によって感じ方が違うことに気づくことができました。また、クラス内で「イヤだ」と「イヤじゃない」の人数比率が半分ずつに分かれる事案が見つかりました。このようなときにトラブルが発生しやすいことを子供たちに伝え、クラスの課題を共有しました。

ネットトラブルについては「どの写真を、どこまで公開するか」を問い、カード分類法を使って考えさせました。はじめは「住所や電話番号は聞かれたら教えることもあるので友達までなら公開できる」と考える児童がほとんどでした。しかし、「信用している友達が、悪気なく情報を公開したら…。」という意見が出ると、個人情報を扱う難しさを感じるようになりました。

4 アンケート結果と考察

毎回の授業終了後に行ったアンケート結果は以下のようになりました（表2、3）。

項目ごとの平均値は、リアルスキルとネットスキルのどちらにおいても「理解度」や「有用性」は高い値を示したのに対し、「必要感」が、4.5（実感度９割）に満たない低い数値ばかりとなりました。また、「理解度→有用性→必要感」と徐々に数値が低下しました。これらの結果から、子供たちは「よく知っている・分かっているから必要ない」と考えていると捉えられました。

事前・事後アンケートの比較では、「ネットトラブルの経験」や「ネットコミュニケーションへの自信」、「ネットトラブル時の対処への自信」の割合が高くなりました。これらの結果から、以前よりも対人トラブルを認識できるようになり、それらへ対応する自信が身についたことが分かりました。しかし、「ネット利用における改善の必要感」にあまり変化が見られなかったことから、児童は現状で満足していることも考えられました。

	授業の積極性	リアルスキル			ネットスキル		
		理解度	生活での有用性	学習の必要感	理解度	生活での有用性	学習の必要感
嫌なこと	授業後にアンケートを実施できず						
聞き方	4.50	4.79	4.92	4.29	4.75	4.63	4.33
話し方①	4.28	4.68	4.72	4.04	4.64	4.64	4.04
話し方②	4.30	4.52	4.48	3.96	4.39	4.48	4.04
怒り①	4.33	4.63	4.50	3.88	4.42	4.46	4.08
怒り②	4.35	4.50	4.46	3.96	4.50	4.35	4.08
断り方	4.68	4.72	4.46	4.20	4.64	4.48	4.24
謝り方	4.50	4.54	4.50	4.08	4.46	4.58	4.15
SNS個人情報	4.65	4.58	4.46	4.15	4.65	4.42	4.23
SNSコミュ	4.42	4.50	4.38	4.12	4.50	4.38	4.19
平均値	4.45	4.61	4.56	4.08	4.55	4.49	4.15

表２　毎時間のアンケート結果

	事前	事後
ネットトラブルの経験	1.09	1.52
ネットコミュニケーションへの自信	2.83	3.48
ネットトラブル時の対処への自信	2.70	3.43
ネット利用における改善の必要感	2.17	2.26

★表2，表3の数値は「1よくあてはまらない」から「5よくあてはまる」までの回答の平均値。

★★表2の黄色は4.5（実感度9割）以上を示す。

表３　事前・事後アンケートの比較

5 これからの課題

単元を通して児童のトラブル意識を高めることができたため、自覚を促すことができたと思います。しかし、子供たちはコミュニケーションスキルをさらに向上させようとする必要性をあまり感じていませんでした。今後はこれまで行った指導に加え、子供たちが現状を自覚し、必要性を感じる内容を取り入れていきたいと思います。

小学校
―実践２―

「難しいけど、楽しい」「成長してるね」と言える授業を子供たちと一緒に創ろう

愛知県あま市立七宝小学校
教諭
鈴木賢一（すずき けんいち）

1 「道徳の約束」を使って、互いに学び合い、成長し合える学級を創ろう

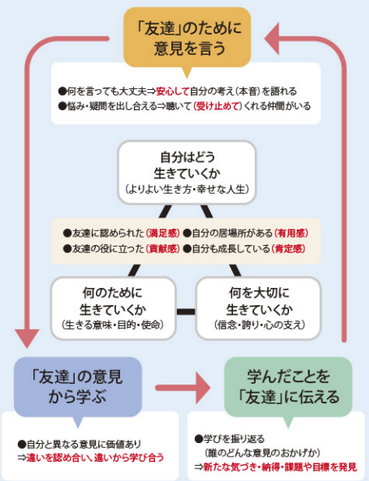
道徳の授業では、「人生、いかに生きるか」という問いに向き合って考えます。それはすぐに答えの出ない難しい問題ですが、共に悩み、語り合える仲間がいると、「楽しい」「もっと考えよう」と思えます。そんな授業を子供たちと一緒に創るために、私は「道徳の約束」を使って、学びの土台、成長の基盤となる学級作りを行っています。

最も大切にしているのは、「違いを認め合い、違いから学ぶ」という姿勢です。「自分と異なる意見に価値あり」と思えば、相手の考えを傾聴することにつながります。聴いて受け止めてくれる友達がいるからこそ、安心して自由に話すことができるのです。自分と友達の意見の違いを比べたり、足りない意見を補い合ったりしながら新たな自分の考えを創っていきます。そうして学びを深めていき、一時間の授業後には、進化・成長した自分に出会える、それが道徳授業の魅力だと感じています。

授業の最後に、誰のどんな意見のおかげで、新たにどんなことを発見・納得したか、課題や疑問になったかを伝え合います。「自分の意見が友達の役に立った」「友達に認められた」という気持ちによって、自己肯定感を高め、自他の成長をより確かなものと感じられるでしょう。

では、この「道徳の約束」を基に行った授業、三年生「おじいちゃん、おばあちゃん、見ていてね」（東京書籍）の実践を紹介します。

◎道徳の約束



2 自分の命をどう輝かせるか 三年生「おじいちゃん、おばあちゃん、見ていてね」

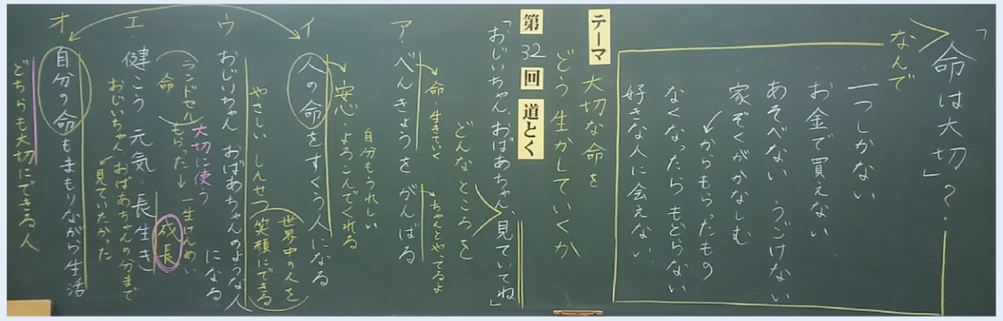
本教材は、宮城県牡鹿郡女川町の男児が、東日本大震災で失った大好きな祖父母に、「悲しいけど、命を大切にして頑張って生きていく『ぼく』を見ていてね」というメッセージを書いた作文です。

授業のねらいを「大切な命を生かして、前向きに一生懸命生きていくことの尊さに気づき、自分の命をどう輝かせるか考え続けようとする意欲を育てる」としました。「命の大切さ」の理解を超えて、「自分の命を輝かせるのは自分」であることを自覚させ、自分の生き方を考えさせるところがポイントです。

3 学びをつなぐ導入 今までの学びを基に、新たな問題意識をもたせよう

まず、「『命は大切』って今までにも学んできたけど、何で命は大切なのかな。」と問いました。子供たちは、様々な理由を考えます（板書❶）。

そして、「たくさんの理由から改めて『命は大切』って分かったけど、その大切な命をどう生かしていったらいいんだろう。」と投げかけました。これが本時を貫くテーマであると同時に、教材を読む視点にもなります。子供たちの頭の中に、「あれ、命の生かし方なんて今まで考えたことないぞ。主人公は命をどう生かしているんだろう。」と問いが立ちます。これが主人公を鏡として、自分の生き方を映し出し、自分の言葉で語ることにつながっていきます。



板書❷　板書❶

4 学びを深める展開 中心発問を対話で深掘りしていこう

教材を読み終えた後、「大切な命をどう生かしていくか、考えられた？」と聞きました。「う～ん」と唸り声が聞こえてきます。「じゃあ、主人公の『ぼく』を手がかりに考えていこうね。」と言い、「『ぼく』はおじいちゃん、おばあちゃんにどんなところを見ていてほしいのか。」という発問をしました。

実際の授業では、アからオまで五種類の意見が出ました（板書❷）。大事なのは、ここからいかに深掘りしていくかです。授業の様子を一部紹介します。

T アからオの中で、自分はどの意見に近いかな。また、もう少し詳しく聞いてみたい意見があったら質問してみよう。

C 私は、初めはアだと思っていたけど、イの「人の命を救う人」っていうのがいいなと思いました。

C 僕もイ。そんな人になれたら、天国のおじいちゃんやおばあちゃんも安心するし、きっと喜んでくれると思うから…。

C 私はエの「健康・元気・長生き」という意見で、おじいちゃんやおばあちゃんの分まで生きようと思ったんじゃないかな。

C でも、私だったら、おじいちゃんたちにもう会えないのは寂しいな。どうしたら元気が出せるだろう。

C 僕も悲しいと思うけど、「おじいちゃんに買ってもらったランドセル」があるでしょ。あれを背負うと「頑張ろう」って気になれるんじゃないかな。

C ランドセルもそうだし、「ぼく」の命もおじいちゃんたちからもらったものだから、それを「大切に大切に使って」一生懸命生きて成長しているところを見ていてほしいって思ったんじゃないかな。

T みんなの命も、両親やおじいちゃん、おばあちゃんからもらった大切なものだよね。みんなは、どんなふうに自分の命を使っているところを見ていてほしい？

ここから、各々が自分の命をどう使って、どのように輝かせて生きていくか語り合いました。うまく言えない子、なかなか考えがまとまらない子もいました。でも、みんなで励まし合いながら一つ一つ言葉を紡いでいきました。

5 学びを振り返り、次につなげる終末 新たな疑問や課題を次の学びにつなごう

終末で、「○○さんの『一生懸命生きて成長しているところを見ていてほしい』という意見を聞いて、私も天国にいるおばあちゃんに、ピアノを頑張っているところを見せたいって思いました。」と語った児童がいました。教室が温かな拍手で包まれました。

「自分の命をどう生かすか」という問いは、容易に結論を出せる問題ではありません。でも、だからこそ、今後も粘り強く考え続け、自分の納得いく考えを見つけ出してほしいと思っています。

東京書籍

本社　〒114-8524 東京都北区堀船 2-17-1　Tel：03-5390-7362（道徳編集部）　Fax：03-5390-6014
支社・出張所　札幌 011-562-5721　仙台 022-297-2666　東京 03-5390-7467　金沢 076-222-7581　名古屋 052-939-2722
大阪 06-6397-1350　広島 082-568-2577　福岡 092-771-1536　鹿児島 099-213-1770　那覇 098-834-8084
ホームページ　https://www.tokyo-shoseki.co.jp/　教育資料データベース 東書Eネット　https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/

令和2年4月発行
Copyright©2020 by Tokyo Shoseki Co., Ltd., Tokyo All rights reserved. Printed in Japan
A4794